

研究主題「児童が達成感をもつための指導の工夫

- 第4学年『水泳』領域を通して - 」

東京都教職員研修センター 研修部企画課
荒川区立尾久西小学校 教諭 後藤潤子

研究の背景とねらい

生涯スポーツとしての水泳につながる学校教育の水泳学習では、児童の水泳経験の差、指導法の相違などから、泳ぎの得意な児童と不得意な児童の泳力や学習に取り組む意欲の差が大きくなっているという現状がある。そこで生涯にわたって水泳を楽しむために児童が技能を習得・向上し「できた・泳げた」という達成感を味わい、意欲的に学習するための指導の工夫が必要であると考えた。そして、目指す児童像を 10～25m程度をクロール・平泳ぎで泳げる児童泳げたという達成感をもって意欲的に学習ができる児童とし、研究のねらいを 児童の実態にあった指導の工夫 達成感をもって学習ができるための指導の工夫の2点にした。

研究の内容と方法

1 研究の仮説

役割分担を明確にした効果的なチームティーチングによる指導や泳力別指導などの工夫を行えば、児童の技能がより向上し、達成感をもって水泳学習を行うことができる。

2 基礎研究

(1) 学校教育における水泳指導の課題について

泳力や学習に取り組む意欲に大きな差のある児童に対して、個に応じた適切な指導が行われていないという課題がある。

複数の指導者による指導が、チームティーチングによる効果的な指導に結びついていないという課題がある。

(2) チームティーチングによる指導の視点について〈水泳学習における具体的な指導〉

個性・個人差への対応

ア 技能の程度の違いへの対応

技能習得のつまずきや習熟の程度に応じた個別指導などによるきめ細やかな指導を行う。また技能に応じてグループを編成する。〈個に応じた指導、泳力別学習グループの編成〉

イ 学習ペース・学習スピードの違いへの対応

個々の児童の学習ペースや学習スピードに応じた指導を行う。〈個に応じた指導、グループ学習、多様な学習場面の設定〉

教師の専門性の発揮

教師が指導の役割を分担し、協力してかかわることにより、互いの持ち味（専門性）を発揮した指導を行う。〈多面的な児童理解・評価、複数指導による安全確保の充実〉

学習集団の規模の弾力化

個人差への対応のきめ細かい指導を実施するとともに学習集団を柔軟に編成し、学習課題に対応した指導を行う。〈多様な学習場面の設定・泳力別学習グループの編成等〉

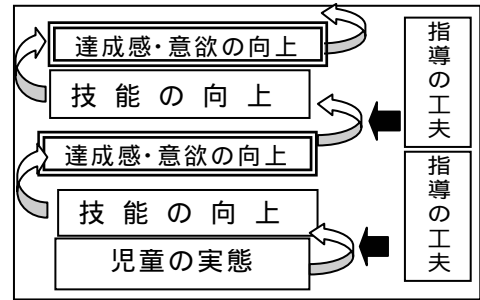
(3) 児童の達成感について

泳力の実態や水に対するイメージなどにより、「できた・泳げた」という感じ方や感じる内

容は一人一人違う。本研究では、学習において技能や学び方などが身に付き、一人一人の児童が自己評価を行う中で、児童が「できた・泳げた」と実感したことが達成感であるととらえた。

(4) 指導の工夫と達成感の関係について (図1より)

図1 指導の工夫と技能の向上及び達成感等に対する考え方



第4学年の水泳学習は、楽しく運動を行う基本の運動「浮く・泳ぐ運動」から技能習得の「水泳」領域に入る最初の学年である。この技能を向上するためには児童が達成感を持ち、意欲的に学習することが大切である。そのためには、児童の実態にあった指導や児童が達成感をもって学習できる指導の工夫が必要であると考えた。

これらの指導の工夫を行うことで、児童の技能が向上し、それにより達成感を感じて意欲的に学習することができる。さらに、より技能を向上させるために、指導の工夫を行うという学習を向上させる構造が考えられる。そこで、役割分担を明確にしたチームティーチングによる指導の工夫 泳法習得のための泳力別指導の工夫の2点について研究を行った。

3 調査研究

荒川区内の小学校4・5・6年児童460名 達成感に関する調査より

- (1) 「泳ぐことができた」「検定で合格した」「長く泳げた」時に、達成感を特に強くもつ。
- (2) 児童は泳力の差にかかわらず、「できた」という達成感を感じる。

4 実践研究

(1) 役割分担を明確にしたチームティーチングによる児童の実態にあった指導の工夫

指導のねらいを踏まえた役割分担の明確化

系統的で詳細な指導計画を作成し、学習グループの指導のねらいや指導内容を明確にする。

泳力別の学習グループの編成

児童の実態にあった指導を行うために、技能が同じ程度の学習グループを編成する。

安全に留意した指導体制

安全な指導体制や学習グループの指導場所を明確にする。

(2) 泳法習得における達成感をもって学習ができる指導の工夫

系統的で詳細な指導計画の作成

泳力別の指導を効果的に行うために、泳力別学習グループの指導のねらいや指導内容を系統的かつ詳細に記す。

初歩的な泳法の習得の重視

泳法の基本的な技能のポイントを明確にした指導を実施する。

(例) クロール：呼吸の習得重視 平泳ぎ：十分な伸びの習得重視

(3) 役割分担を明確にしたチームティーチングによる指導と泳法習得のための泳力別指導の工夫を取り入れた指導計画

表1 泳力別の学習グループの編成 < 第4学年児童：95名(3クラス) 指導者：4名 >

Aグループ(17名)	Bグループ(33名)	Cグループ(15名)	Dグループ(30名)
水慣れ～浮くの段階	け伸び～25m未満の泳力の段階	クロール・平泳ぎ 15～25m程度の泳力の段階	クロール・平泳ぎ 25m以上の泳力の段階

95名の児童及び4名の指導者において4つの泳力別の学習グループに編成。(原則的に検定表を基にする)

表2 第5・6時指導計画 ~ は表3の指導形態・内容による

Aグループ(T2)	Bグループ(T4)	Cグループ(T3)	Dグループ(T1)
平泳ぎの泳法を理解するために、T2の示範による全体指導			
浮く・け伸びの指導	け伸びの指導	リズムよく泳ぐ平泳ぎ	け伸びを意識した平泳ぎ
浮く ・クラゲ浮き ・ダルマ浮き け伸び ・手足を伸ばす ・体の力を抜く 平泳ぎのけ伸び ・手足の形と共に十分伸び たけ伸びを行う	け伸び・パタ足 ・体の力を抜く ・ビート板を使つてのパタ足 平泳ぎ ・手足の形や呼吸 ・十分に伸びたけ伸びを行う	平泳ぎのけ伸びの確認 ・け伸びを十分行い、リズム よく泳ぐ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;">2グループ合同指導</div> T1：全体監視・全体指導(プールサイド) T3：個別指導(平泳ぎの泳法の形を中心に) リズムよく泳ぐための平泳ぎ ・手足の形(T3) ・伸びのある平泳ぎ(T1)	平泳ぎの泳法の確認 ・呼吸の回数を減らし、け伸び を意識して泳ぐ

全10時間の学習過程における第5・6時の全体指導・泳力別指導・合同指導の指導場面の抜粋。

表3 ティームティーチングによる指導の視点と役割分担

指導形態・内容	TT指導の視点	具体的なTT指導	具体的な役割分担
全体指導 平泳ぎの泳法 を理解する。 (第5・6時)	・多様な学習場面の設定 ・指導の役割分担 ・複数指導による安全確保	・教師が泳法の示範を行うことで児童は 泳法をイメージすることができる。 ・役割分担を明確にし、各担当の教師 は、児童がより泳法を理解できるように 支援する	[プールサイドにて全体指導] ・示範(T2):け伸びを十分に意識してリズ ムよい平泳ぎの示範 ・説明(T1):泳法の説明 ・補助(T3・4):児童からの質問の返答
泳力別指導 力を抜いて浮く・ け伸びができる (第5・6時)	・多様な学習場面の設定 ・多面的な児童理解・評価 ・指導の役割分担 ・個に応じた指導 ・課題別学習	・泳ぎの苦手な児童に対しては、児童の 実態にあった個別指導とグループ指導 を行う。	[Aグループの指導(T2)] ・Aグループ内を更に、浮く・け伸びの2グ ループに分け、グループ学習を行う。 ・児童の実態に応じて、力を抜く個別指 導を行う。
泳力別指導・2 グループ合同指導 平泳ぎで25M 程度泳ぐことが できる。 (第5・6時)	・多様な学習場面の設定 ・多面的な児童理解 ・多面的な評価 ・指導の役割分担 ・個に応じた指導 ・課題別学習	・泳力の違うグループを合同で指導する ため、児童は泳法習得のための観察学 習を行うことができる。 ・2グループ合同のため個別及び全体 指導を行うことができる。	[CDグループ合同指導(T1・3)] ・全体指導及び全体監視1名(T1) プールサイドから、リズムある泳ぎの指導 及び全体の安全面を監視する。 ・個別指導1名(T3)水中での平泳ぎの手 や足の形の補助を行う個別指導を行う。

研究の成果と考察

1 児童の達成感について < 検証授業の学習カードから >

表4 泳力別グループの達成感・自己評価との関連(%)

児童の感想	グループ	A	B	C	D
		めあて 達成感	55	45	37
自己評価 達成感		4	9	11	8
達成感のみ		33	38	27	31
めあて 自己評価		2	4	6	3
達成感 めあて		0	1	3	2
自己評価 めあて		0	0	9	1
その他		6	3	7	4

めあて：授業前に各児童が設定した具体的な目標
 達成感：「できた」「泳げた」と実感すること
 自己評価：目標に対しての児童自身の評価

めあて 達成感：めあてに対して達成感をもてたこと
 自己評価 達成感：自己評価を行い、さらに自己評価した
 学習内容の中で達成感をもてたこと
 達成感のみ：達成感をもてたことのみを記入したもの
 自己評価のみ：自己評価のみを記入したもの
 めあて 自己評価：めあてに対しての自己評価をしたこと
 達成感 めあて：達成感を実感し、更にめあてをもつこと
 自己評価 めあて：自己評価し、更にめあてをもつこと

中学年という児童の発達段階から、検証授業の学習カードにおいて多様な表現方法があった。そこで、児童の達成感・自己評価等を、泳力別の学習グループ内においてどのように表れるのかをまとめた。(各グループ内100%)

どの児童も技能の向上を感じた時、達成感をもって学習に取り組んだ。その結果、次の授業への意欲をもつ姿も見られた。さらに、設定しためあてが達成できた時、多くの児童が技能の向上を感じ、達成感をもって学習に取り組むことができた。また、目標に対して「できなかった」などの自己評価を行い、その学習内容の中で少しでも「できた」と感じる技能の向上があった時、達成感をもって学習に取り組む姿が見られた。(表4 自己評価 達成感の例：平泳ぎの息つきは難しかった 何回か息つきはできた)

2 児童の技能の向上について

表5 児童の技術の向上(検定表) (%)

級の向上	グループ	A	B	C	D
上がらなかった		13	10	50	46
1段階上がった		26	32	36	33
2段階上がった		7	42	7	14
3段階上がった		32	16	0	7
4段階上がった		7	0	7	0
5段階以上上がった		15	0	0	0

・学習前と学習後の検定表による向上の変容
 ・泳力別の学習グループ内100%
 例) 1段階上がる：9級が8級になったことを表す

泳ぎの不得意な児童は、検定を数段階合格するという技能の向上が見られた。泳ぎの得意な児童の半数が、検定を1段階も合格できなかった。その理由としては、合格するという具体的なめあての難易度が級が上がると高くなり、合格が難しくなるからだと考えられる。しかし、児童は検定が不合格の時でも、達成感を感じるがあった。これは検定の合否を問わず、児童自身が技能の向上を感じた時、それが達成感につながったからだを考える。(例：検定では平泳ぎの足ができなくて不合格 自分では前よりも平泳ぎがリズムよく泳げるようになった)

3 研究のまとめ

(1) 指導法の工夫について

泳力が同程度の学習グループを編成した泳力別指導の工夫や、指導のねらいを踏まえた教員の役割分担を明確にするための指導計画を作成し、ティームティーチングによる多様な学習場面を設定した指導の工夫を行った。それにより泳ぎの不得意な児童において技能の向上が顕著に見られ、多くの児童において達成感をもって学習に取り組むことにつながった。

(2) 系統的で詳細な指導計画表(スイスイ表)

児童の技能の向上には、児童自身が「できる」と思って設定するめあてが、スモールステップを踏んだ指導のねらいに沿ったものであることが大切である。そこで、検証授業で作成した系統的で詳細な指導計画を、児童の実態にあった学習カードにも活用できるような指導資料を「スイスイ表」(表6)として作成した。この表では、教員が指導のねらいを踏まえた明確な役割分担の資料として指導内容を系統的に示したものである。また、めあての設定、指導の言葉がけ、検定に向けての資料など、指導資料としても活用できるように作成した。

表6 スイスイ表(抜粋)

指導内容 目標	検定	具体的な指導内容 ：指導の順番	指導上の留意点	指導の言葉がけ	学習カード 泳ぎのめあて
平泳ぎ 手と呼吸 手を前で 止め、け伸 びの姿勢 をとって、 呼吸がで きる。	5 級	陸上の指導 水中の指導 手を伸ばす。 ハート型を描くようにかく。 手をそろえながら顔を上げ、息 つぎを行う。 顔を下げ耳を腕ではさむよう にして手を伸ばし、け伸びの姿 勢を作る	息つぎの時頭を上げず ぎないように留意する。 平泳ぎでは、手を伸ば した時、け伸びの姿勢を つくることに留意し、リ ズムよく泳げるように 指導する。	ハートの形を作ろう。 わきをしめて、息つぎを しよう。 しっかりのび よう。	ハートの形を作る。 かいたらわきを しめる。 け伸びの姿勢 を十分に作る

指導上の留意点等の ~ については、具体的な指導内容の記載内容に対応するものとした。

今後の課題

- 「スイスイ表」を活用して児童の実態やねらいに即した効果的な指導について、さらに授業の中で検証する。
- 児童が達成感をもつためには、一人一人の児童が実態にあっためあてをもつことが重要である。めあてのめたせ方の工夫として、学習カードの活用について研究を深める。